図書館員のビジョン
-IFLAクアラルンプール大会を振り返って-

メタデータ	言語:
	出版者: 日本図書館協会
	公開日: 2024-01-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 三浦,太郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000196

小特集★IFLAクアラルンプール大会レポート

図書館員のビジョン

――IFLAクアラルンプール大会を振り返って――

三浦太郎

クアラルンプール開催

マレーシアの首都・クアラルンプールには高層建築が建ち並ぶ。現在も市街を少し歩くと，至るところでビルの建設工事が行われている。高さ452メートル，88階建ての威容を誇るペトロナスツインタワー（1998年完成）はその代表であろう。1980年代以降，「ルック・イースト政策」に基づき，着実な経済発展を遂げてきたマレーシアの近代化を象徴する建物である。タワーは主にオフィスビルとして使われ，下層階には大型ショッピングモールSuria KLCC（スリア・クアラルンプール・シティセンター）が併設されている。伊勢丹，紀伊國屋書店，ユニクロ，無印良品といった日本でお馴染みの店舗も見られる。

タワーに隣接する緑豊かなKLCC公園を抜けて７～８分ほど歩くと，国際会議場がある。2005年に建てられ，3,000人収容可能なホールを筆頭に，23の会議室が設けられている。2015年に国際会議場協会（AIPC）革新賞を受賞するなど，その機能性が高く評価されている。

▲国際会議場周辺（手前がKLCC公園）

2018年８月24～30日，この国際会議場で第84回国際図書館連盟（IFLA）年次大会が開催された。マレーシアでは初めての大会（東南アジアでは４回目）となった。大会テーマは「図書館の変革，社会の変革」である。

参加者は，110を超える国や地域から約3,500名を数えた（前年比12％増）。約250のオープン・セッション，70以上の企業展示，ポスター発表122件（登録）が行われた。日本からも30名を超える人びと（名簿登載22名を含む）が参加し，セッションでの発表が13件（後述の「日本コーカス」を除く），ポスター発表が６件の計19件に上った。

発表者は以下のとおりである。

・プレ会議（23日）

シンガポール（２件）：河村宏氏（支援技術開発機構），牧野綾氏（調布デイジー）

ペナン（１件）：長塚隆氏（鶴見大学）

・本会議

25日（１件）：福田一史氏（立命館大学）・三原鉄也氏（筑波大学）

26日（１件）：河村宏氏

27日（１件）：岩崎れい氏（京都ノートルダム女子大学）

28日（５件）：青木玲子氏（国立女性教育会館），古賀崇氏（天理大学），小林公夫氏（国立国会図書館），長塚隆氏，吉間仁子氏（国立国会図書館）

29日（２件）：井上佐知子氏（国立国会図書館），松本直樹氏（慶應義塾大学）・下田尊久氏（藤女子大学）・小田光宏氏（青山学院大学）

ポスター（６件）：北野仁一氏（国立国会図書館），佐藤正惠氏（千葉県済生会習志野病院図書室）・三輪眞木子氏（放送大学）・磯部ゆき江氏（日本図書館協会），角田裕之氏（鶴見大学）ほか（※日中共同），岡部晋典氏（愛知淑徳大学）・原田隆史氏（同志社大学）・佐藤翔氏（同志社大学）ほか，田中杏里氏（立

正大学）・田中麻巳氏（立正大学図書館），ミヒャエラ・ボーデスハイム氏（東京ドイツ文化センター）

「日本コーカス」

初日（８月24日）は，午前中から分科会ごとに45に上るビジネス・ミーティングが開かれた。夕方には，国や地域ごとに関係者の集まるコーカス（地域会議）が13ほど行われた。欧米各国のほか，東アジアでは，中国，韓国，アジア・オセアニア（アフリカなどと合同）の集まりがあった。

翌２日目（25日）午前中には，ホールで開会式が行われた。冒頭，ナフィサ・アーマド大会実行委員長（マレーシア国立図書館長）は，“図書館はコミュニティの心臓部（Heart of Community）である”とその重要性を指摘した。続いてモハマド・アミン・ノルディン市長が，“現在，クアラルンプール市内に図書館は16館だが，2020年までに40館に増やしたい”と意欲を述べると，会場から大きな歓声が上がった。

IFLAのペレス・サルメロン会長，ゲラルド・ライトナー事務局長，マレーシアのモハマディン・ケタピ観光大臣のスピーチがこれに続いた。劇団のパフォーマンスを挟んで，アリ・ハムザ内閣官房長官の基調講演があった。図書館システムの近代化，情報スキルの向上，情報通信技術（ICT）を活用した情報の広がりについて現状認識が示され，国の政策の中で図書館を振興していくことが，（リップサービスも含まれていたであろうが）うたわれた。また，式の最後には，92歳で首相に返り咲いたマハティール首相からのビデオ・メッセージが放映された。近代化の成果として図書館に言及されたのは印象的であった。

開会式が終わるとすぐ，12時半からボールルーム１にてセッション71a「日本コーカス」に移った。日本コーカスの開催は今回が初めてである。これまでも，日図協ではIFLA大会期間中に関係者が非公式に夕食をともにし，情報交換する機会を設けてきた。しかし今回は，IFLAの各分科会における議論について，より広く把握することができるよう，年初からIFLA事務局と連絡をとりつつ，コーカスを設定することとなった。合わせて，日本から選出されている分科会委員や連絡委員の方々に報告を依頼した。

▲日本コーカスでの報告

報告者は以下の12名である（カッコ内は分科会の略称等）。発表内容はそれぞれ５分程度にまとめていただいた。

井上靖代氏（FAIFE：図書館の自由），岩崎れい氏（SL：学校図書館），護得久えみ子氏（CYA：児童・ヤングアダルト），下田尊久氏（LTR：理論），竹内ひとみ氏（PL：公共図書館），竹鼻和夫氏（IT：情報技術），兎内勇津流氏（IM：先住民），中島尚子氏（CYA　※護得久氏と共同報告），長塚隆氏（RSCAO：アジア・オセアニア），野村美佐子氏（LSN議長：特別なニーズ），村上健治氏（LSM：多文化），吉間仁子氏（GL：政府情報）

報告を通じて，現在，IFLAで進められているグローバル・ビジョンに対する各分科会の取り組みや，中期的な課題となっている組織改編（分科会の統合）への対応について認識が共有された。また，サテライト・ミーティングの様子，ベストプラクティスの紹介，今後のミッドターム・ミーティングでの検討事項など，分科会での関心について理解が深められた。個別領域のガイドラインについても，SL，CYA，PL，GLの各分科会で改訂作業が進められていることや，FAIFEで「図書館と知的自由に関する声明」（1999年制定）が20年ぶりに改訂予定であることが分かった。

参加者は日本人関係者32名であった。RSCAOで情報コーディネータを務める長塚氏からは，“皆さんも，ぜひ分科会の一員となって，組織を運用

する側で大会運営に関わってみてください”と呼びかけがあった。

コーカスはIFLA大会の正式プログラムとして位置づけられており，日図協国際交流事業委員会として今後も引き続き，こうした機会を設けていきたい。運営上の反省点としては，今回は参加想定人数に比して部屋が広く，また，当初は軽食をとりながらの予定であったが，室内飲食禁止であることが当日わかった。使用条件などについては，事前にIFLA事務局と調整を図っていく。

この後，大会では夕方16時からコンフェレンス・ホールでレセプションが行われ，多くの参加者がワインや軽食を片手に，企業展示などを回った。会場のあちこちで歓談の輪が広がっていた。

オープン・セッション

３日目以降はオープン・セッションがプログラムの中心となった。一部を紹介したい[1)]。

IFLAの動向に関連するセッションとして，セッション90「IFLAハイライト」（26日8:30－9:15，ホール）があった。ここでは，ライトナー事務局長から，とくにグローバル・ビジョンの進捗状況が説明された。IFLAは包括的（インクルーシブ）な組織であり，世界中の図書館員のアイデアを結集することによって，図書館界の力を内外に示すことができる。2017年４月に開始されて以来，グローバル・ビジョン・ワークショップは185回開催され[2)]，日本も含めて190か国の9,291人が参加したという。参加者の経験年数をトータルすれば，469,152年にも達するとのことである。

続くセッション91「変化の原動力（IFLA会長セッション）」（26日9:30－12:00，ホール）では，IFLAの歴代会長５名とサルメロン現会長，フィンランド図書館協会長が顔を揃えた。それぞれの会長経験を踏まえて，今後のIFLAの方向性が議論された。

中でも，最初に登壇したイングリット・パラン氏は，図書館は「変える力」を持つ機関であり，社会的に多様な価値観の重視（ダイバーシティ）や包括性（インクルージョン）の理念を堅持していかなければならないと主張した。また，最古参となるクラウディア・ルクス氏は，就任当時（2007年），図書館の議論が“館界に閉ざされていた”点を振り返り，社会的なつながり，とりわけ政治の世界にコミットすることの重要性を指摘した。今日，国際連合（UN）や世界知的所有権機関（WIPO）との議論の中で図書館のステータスを高めることは強く意識されている。

思うに，2015年にUNで「持続可能な開発目標」（SDGs）が発表された際，「図書館」の語は含まれず，依然として図書館に対する国際認識の低さが表れていた[3)]。その後のグローバル・ビジョンや，2018年８月に公開された「世界の図書館マップ（Library Map of the World）」の試みは，図書館界の「可視化」の一環と見ることができる。世界の図書館団体の代表としてIFLAは国際的に重要な交渉の場に臨み，図書館の具体的な取り組みや成果を発信していく必要があると言える。

▲セッション風景（ポスター展示）

このほかにも，各セッションで多様なテーマが取り上げられていた。例えば図書館情報学教育のテーマに関しては，セッション220「強力な図書館情報学教育をつくるIFLAの役割」（29日8:30－10:30，ボールルーム２）などがあった。ここでは，LTRのクララ・チュー氏（イリノイ大学モーテンソンセンター）から，図書館情報学領域の再定義が必要である点が問題提起された。そして主要な論点として，①ローカルな仕組み（ストラクチャ）を規定する国際的なリソースを展開すること，②教育の質保証を行う上で基準となる枠組みをつくること，③コア領域と他のコンピテンシーを認識することが挙げられた。

チュー氏の趣旨説明後，参加者は各テーマに分かれてテーブル討議を行った。筆者は②のテーブルにつき，６名の参加者と席をともにしたが，IFLAがキープレイヤーとしての役割を果たし，国際的な基準を示すことが大切であるとの認識は一致していた。一方，教育内容に関しては，「情報コンサルタント」を養成するようなカリキュラムが必要であるという意見や，国ごとの教育レベルの相違（大学の学部養成か大学院教育か）を考慮しなくてはならないといった意見が出された。国際基準の制定に向けて，性急に結論は得られるものではない。こうした議論の積み重ねが必要である。

同じ日のセッション229「ウィン・ウィンの関係」（29日10:45－12:45，ホール）でも，教育の質保証をテーマに議論がなされ，マレーシア，中国，日本，カメルーン，フィンランド，香港の事例が報告された。日本については松本直樹氏から発表があり，国内で図書館協会による質保証の仕組みは存在しないが，日図協図書館情報学教育部会において，質保証に関するプログラムが提供されている点が紹介された。発表直後の質疑では，バングラデシュの参加者から制度的な質保証が重要であるとの発言も寄せられた。

その後，セッション全体の討議では，他の発表者から提示された視点である「（職場研修における）メンターシステム」を中心に議論が行われた。教育の質保証のあり方を考える上で，他国の事例を参考にしながら，ローカルな課題の解決に向けて認識を新たにするような，議論の糸口が提示された場であったように思う。

総会

研究発表以外のプログラムにも目を向けると，まず４日目（27日）夕刻から夜間にかけて，マレーシア・ツーリズム・センター（MaTIC）で，全体の公式イベント「文化の夕べ」が開催された。屋内ステージ上で，民族衣装に身を包んだ踊り手による舞踊が披露されたほか，屋外のあちこちでギターやバイオリンの生演奏，バルーンアートなどの大道芸が行われた。現地料理を楽しみながら，さまざまな国の参加者とも交流することができ，有益なひとときを過ごすことができた。

５日目（28日）午前中には，有志14名で国際交流基金クアラルンプール日本文化センター図書館を訪問した。これは今年の『図書館雑誌』５月号に今大会へのお誘い記事を寄稿いただいた同館の坂本智子氏を介して実現したものである。

当日はセンター副所長の栗原毅氏らに対応いただいた。蔵書1.4万冊ほどの小規模な専門図書館であるが，日本語学校の学生や現地企業の邦人利用が盛んであるという。職員の方々に，この場を借りて御礼申し上げる。

▲日本文化センター図書館にて

夕刻にはホールで総会が開かれた。冒頭のサルメロン会長のあいさつでは，まずUNのSDGsへの対応が取り上げられ，グローバル・ビジョンと「世界の図書館マップ」によって，図書館界のつながりが向上した点が強調された。ライトナー事務局長からは「戦略プラン」に関する報告があり，2019年３月までにアクション・プランを示し，来年のIFLAアテネ大会で2024年までの活動計画を示す予定であることが述べられた。

バーバラ・リゾン氏からの決算報告では，2017年度の収入201万ユーロに対し，支出198万ユーロと発表された。予算規模が前年比で３割以上縮減したが，これは「キー・イニシアチブ」や「レガシー・プロジェクト」の活動が縮小し，「ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団」からの寄附金が減った結果である。ただし，同財団からの寄附金が収入に占める割合は34％と高い。また，会費収入もほぼ同じ割合ながら前年比8,000ユーロ減（71

万ユーロ），IFLA ヴロツワフ大会開催収支も1.8万ユーロの赤字が計上された。事業活動を展開する上で外部資金は欠かせない状態にある。

総会では，個人会員の会費改定に関する動議が１件，審議された。現在の会費154ユーロを75ユーロに，また，学生会員などについても現在の会費66ユーロを50ユーロに下げる提案であった。これに対し，複数の出席者から反対意見の発言があった。特に“会費改定については，機関会員と個人会員を一体的に議論すべきである”と，議論の進め方に疑義が示された。ライトナー事務局長からは，“世界には図書館協会が存在しない国や地域が存在する。そうしたケースでは関係者に個人会員として加盟してもらう必要がある”と説明があり，結果的に賛成多数で可決された。

会費改定について，これまでIFLA 執行部から，機関会員の会費値上げが定期的に提案・承認されてきた印象がある。会費収入が頭打ちになる中で，今回の一部値下げと，今後の機関会員の負担増が安易につながらないか，注視したい。

議事の約半分は６日目（29日）の閉会式に持ち越された。閉会式では，IFLA の活動に功労のあった人びと・団体への各種表彰や各賞の授与が行われた。このうち最優秀ポスター賞には，デジタル時代の児童の読書習慣を取り上げたデンマークの図書館員が輝いた。また，昨年の大会から始まったWLICWOW も発表された。これは，ソーシャルメディアを最も効果的に活用して，今大会に関する情報発信を行った個人に与えられるもので，ニュージーランドの図書館員が受賞した。このほか，将来国際的に活躍する人材を育成する「国際的リーダープログラム2016－18」の修了生８名の紹介も，この場で行われた。

最終日（30日）には，市内や近隣の各館種の図書館の見学会（ライブラリー・ビジット）が実施された（マレーシア国立図書館については，この日以外も大会期間を通じて見学申込可能であった）。図書館の立地環境や，地元の人びとがどのように図書館を利用しているのか，間近で目にすることも，IFLA 大会参加の楽しみのひとつである。

▲マレーシア国立図書館にて

今大会を通じて，世界各国の図書館員や図書館関係者が，図書館に対する自らのビジョンを鋭く問われていたように思う。その総意が図書館界の変革を導き，やがてはそれが，大会テーマに掲げられたように，社会全体へと波及することを願ってやまない。

来年のIFLA 大会は８月24～30日にギリシア・アテネで開催される。2020年はニュージーランド・オークランドでの開催が正式発表されている（７月28日～８月５日の期間で実施予定）。IFLA 分科会委員の方々をはじめ，現場の図書館員，大学教員や研究者，大学院生など，図書館関係の皆さまのご参加を，心よりお待ちしております。

［注］

以下の参照先の最終アクセス日は，いずれも2018年９月17日である。

1）発表ペーパーの多くは，“Conference Programme”（https://2018.ifla.org/conference-programme）で見ることができる。

2）2018年５月に開かれたアジア・オセアニアのワークショップについては，熊倉優子「IFLA グローバル・ビジョン・ワークショップ＜報告＞」『カレントアウェアネス－E』No.349, 2018.6.（http://current.ndl.go.jp/e2037）を参照されたい。また，グローバル・ビジョンの報告概要については，今年の本誌10月号で野村美佐子訳「グローバル・ビジョン　報告概要」（『図書館雑誌』vol.112, no.10, 2018.10, p.689-691.）の日本語訳が紹介されている。

3）2017年10月の全国図書館大会において，河村宏氏がSDGs に対する図書館界の国際的な取り組みを整理している（「第22分科会 「持続可能な開発のための2030アジェンダ」をめぐる動向」『第103回全国図書館大会東京大会記録』日本図書館協会, 2018.3, p.227-230.）。

（みうら　たろう：JLA 国際交流事業委員会委員長，明治大学）

［NDC10：010.6　BSH：国際図書館連盟］